

幼児教育の文化性 (四)

— 講習筆記 —

倉 橋 惣 三

五四

目次

- 第一 序論
- 第二 道徳教育
- 第三 宗教教育
- 第四 藝術教育

(第三宗教教育のつゞき)

大變問題が廣くなりましたが、さう云ふ理窟は、幼児の場合に於てはハッキリ斯う言へるのであります。若しも大人の場合でありましたならば、頼る可き事と頼る可からざる事とがハッキリ分る筈でありますし、さう云ふものに頼る可きか頼る可きでないか云ふ事もハッキリ辨へがつく譯であります。それがつかなければ、愆に目が眩んだ云ふか、餘程さうかして居る云ふ様な事になるのであります。理窟は兎に角、さう云ふ位の判別はつく譯である。その上で尙ほ且、

下らぬ迷信に陥る云ふ事は、よくよく大人が迷信に入る前に先づ少し狂つて居る言はなければならぬのであります。然し乍ら幼児の場合に於きましては、何事をお願すべきであるか、お父さんにお願すること、お母さんにお願すること、神様にお願すること、そのらの差別等はつきませぬ。お小遣を頂戴云ふ事はお母さんに言ふ他ないのでありますが、それを神様のところに行つて、「お母さんは拾錢位しかくれないから、壹萬圓位くれるのはあるまいか」云ふのは、詰り持つて行き所が違ふのであります。又、さう云ふ事を持つて行く可きか云ふ事が分りませぬ。のみならず、一體何に頼る可きか云ふ事も小さい子供に分る筈がありません。大人でも、宗教の對象をハツキリ正しく捉へて行く云ふ事は容易ぢやないのでありますから、幼児には尙ほ更難しい。

そこでさつき申しました大きな一般的な理窟は兎に角ミしまして、幼児の場合に於て、頼むか頼るか云ふ方の事を先にして行きますと、寧ろその子供の宗教性を、さう云ふ慾をもつて宗教に赴く様な傾向に養ふ……導くことにならぬミも限りませぬ。小さい時から、神様の前に行く云ふ事は何か請求に行く事である云ふ癖がついて居る事は、甚だ危険であると思ふのであります。そこで別に、御厄介にならぬ云ふ様な、そんな勝氣な事を言ふのではありませぬけれども、厄介になる云ふ方を先にしないで、一應感謝する云ふ氣持の方から養つて行けば、その心からは、決してずるい下等な、卑しい政策本意の宗教の様なものにはなつて行かない譯であります。幼児の場合には、理窟も理窟でありますし、幼児そのものがまだ宗教に對して、その對象ミ、依頼すべき内容を決める力がありませんから、さうしても斯う云ふ事でもやつて行かなければならぬと思ふのであります。子供が親に色々な事を頼まみすのは、さう云ふ心理であらうか。決して、親にさう言へば何かくれるから頼む、云ふのではなからうと思ひます。それは、學生なんかは段々する奴が出来まして、親のところに電報を打つて「講習一週間延期、金送レ」(笑聲)なんと言へば、直ぐ爲替が来るかミ考へる手もある

のであります。然しこれはまあ、親を權つてやれ、親のミこころには確かに金があるから取つてやれ」云ふするのですけれども、小さい子供が親に頼むのは、親にしてくれる力があるからせびつてやれ云ふのではなく、日頃親に感謝して居ります——さう一々感謝云ふのは言葉が強いが——親は自分に好意を持つてくれる人である云云か……しみじみ親だから頼みに行くのであります。自分に好意を持たざる人のミこころに頼みに行く云ふのは、最も下等なる事であります。頼みから始めて人に結びつく云ふのは、これは外道なる事であります。日頃感謝して居るから、つひ頼み心になつて行く云ふのが當り前の順序でありまして、子供が親に無遠慮にするのも、そこから出て来る。こゝによります云、子供は、親にねだつて居り乍ら、何をねだつて居るか分らない事があります。「何するんだい？」云訊かれて、「何でもいゝから兎に角ねだらしめよ」——これは言ひ方によりましては非常にするいのでありますが、ものが欲しいのでなく、ねだる心を感じて持つて行くのであります。そのねだる心は、向かふの人の好意云、此方の氣持が、さう云ふ形で反映して來たに他ならぬ云言つてもいゝのであります。何だか、有難い云云を感じをもこにして、そこから、濟まぬが一つお願に行かうか、云云ならば宜しいのであります。先へ、依頼心云か慾云か云ふ様なものを本體云して、感謝は後から來る決算である云云考へ方は、健全なる宗教的態度云非常に相容れないものである。人間同志の關係では、感謝は後から來る、お禮……云云のは、後からお禮を言ふのは、極く正直に考へれば、後になつてお禮を言はざるを得なくなるでせうけれども、こゝによつたら、先に言つて置いたならば損かも知れないから、確かに後になつて見届けてから、物をしつかり受取つてから、調べてから、宜しい云言つて感謝する、先に感謝したらごんな目に遭ふかも知れない云云心も入つて居るかも知れませぬ。イギリス人は、よく人にものを頼みます時に「サンキュー、アドバンス」云云言葉を使ひますが、私は英文で手紙等を寫して書く時はおかしいと思ふ。「斯う々々云ふ事に就て御依頼致します。サンクス、アドバンス」豫め感謝致し

て置きます。私はそれを書き乍ら、二つの意味で不思議で堪らない。一つは、先に感謝して大丈夫だらうか、若し頼んだ事をしてくれなかつたら、感謝を取り返す譯に行かない、だから日本流に、後に計算致す可く候、ミ云ふのが當り前ですが……。それは少し此方が打算主義ですが、もう一つは、先に感謝して置くミ云ふのは、少しするく立廻る。——幼稚園協会の聴講料なんか、先にお出しになつて居ますけれども、本當は後からお出しになつた方がいゝですね。詰らなかつたら少し安くしていゝかも知れませぬ。(笑聲)——それを、先に出すのは、向ふをギリ／＼しめつける事になる。先に感謝されるミ、嫌々乍らこの用をきいてやらなければならぬ、ミ云つた様に縛られるものでありまして、さう云ふ下等な氣持から言ふミ、サンクス、アドバンスミ云ふ事はおかしいが、私は斯う解釋する。「日頃あなたには感謝して居る。そのあなたなるが故に、遠慮なくお願する」ミ斯う云ふ意味になると思ふのであります。これは非常に美はしいのであります。「切迫つまつた場合、余儀なく頼み候、うまくやつてくれれば後で考も有之候」ミ云ふ契約を神様のミころでやるのは非常に間違つて居る。あの神様に相當お賽錢を注込んだが眼病が治らぬから他に行つちやつた、ミ云ふのは、宗教の名に於て、人間の劣劣なる感情を暴露して居る場合だと思ふのであります。ミ云ふのは少し言ひ過ぎますが、さう言つて置いて、此方では、人間ミはさうしたものだミ責めやしない。一體人間ミは劣劣なものであります。劣劣で弱蟲で慾張りでする、これが人間の本當の姿であります。それがせめて多少美しい形に出たミころが宗教なんでありまして、だからサンクスアドバンスミ云ふのは、充分御諒解頂けると思ふ。

これは、理窟ぢやないのであります。幼兒を捉まへて、豫め感謝しなければならぬ……死ぬ間際になつてもそんな氣持で行けるか行けないかお互分らない事でありまして、理窟でそんな事を言つても仕様がな。けれどもさう云ふ風な事を感じさせなければならぬ。何所かで感じさせるには——今度の私の講習、少し話がこんな問題ですから、朝の修養

講座の様になりました甚だ相済みませぬが、午後、まあラヂオ體操をやりますから……甚だ相済みませぬが——さう云ふ譯ですから、幼稚園の先生に云ふものゝ根本の第一條件として、感謝性を湛へて居るに云ふ事を必要とするのは、そこからであります。

私は幼稚園の保姆を招聘する時に、色々體格検査をします。ハ、ア、成程此處に心臓があつて音がして居る。胃袋があつて内分泌がある、云ふ事を調べると共に、頭にきの位の智能が這入つて居るか、それだけ、宇宙さか人生に就て感謝性があるか、尠くも非感謝性、不平家であるかないか云ふ事は重要な條件であります。不平家は堪りませぬ。私としては不平家も宜しい。私がつひ下らぬ事で嬉しくなつて了ふのを、「深刻なる人生、却々不満である」と言つて下されば私も非常に刺戟を受けるが、小さい子供にはそんな事は分らないのでありまして、感謝性より他に、人生を健全にする途はありません。ですから、理窟で感謝せよと言つても仕様がなから、その先生自身の心の中にある感謝性、それがずつと行く。まあ、感謝性のある人無い人は、事毎に違ひます。雨が降つても「あゝ降りやがつた」と言ふ人もあるし、「いゝおしめりだ」と言ふ人もあるし、その感謝性があるかないかは、身邊に居ります幼児に非常な根本の影響を與へて行くものであるのです。

だから私は、宗教を教へる爲に幼稚園をお開きになる場合は、ミツシヨンも佛教も、謂はば宗教を傳へる爲であつたらば、さうも子供を捉まへて少し藥が利き過ぎる氣がする。けれども宗教から出ていらつしやる保姆諸君さか幼児教育者に非常に敬意を表するのは、その人が本當の宗教家である限り、その感謝性が言葉の端にも出て來るから、普通の義務なんかでやつて居ります場合と違つて來ると思ふのであります。

そこでこれは幾ら言つてもきりのない事でありまして止めますが、その感謝性だけでそんならば宗教心と云ふものゝ

要素は盡きるだらうか云ふも、それが宗教です。それが宗教でありませんが、それに添へまして、本當にこれが宗教の形になつて、感謝云ふものは宗教ばかりでなく、社會的生活に於きましても根本である。人間に感謝性さへ養はれて居ればその人は決して間違つた事にならないのでありますが、それ程一般的な事ですが、宗教云ふ特定の形になつて來る爲には、もう二つ問題を考へていゝかと思ふのであります。

二、信賴性

三、神祕性

信賴性云ふ字と神祕性云ふ言葉を以て説明しようかと思ふのであります。

これは極く簡單にお話して置きますが、信賴性云ふ申しますのは、少し言葉が誤解を起すところがあります。「賴」云ふ字が宗教にくつ付いて居る。慾張つた頼み心、依頼心と似て居ります、言葉で、寧ろ「信」でいゝ。「信性」でいゝ譯であります。そこでその信性云ふ様な事は何であるか言ひます云ふも、そこに問題が起つて來ます。

昨日のお話で、人間に、そのキャラクターの中に彌蔓的に感謝性がある、電池の中に、電氣がポテンシャルに一杯になつて居る如く感謝性が満ちて居れば、何所かで放射する機會を探して居る。こつそり電氣が通ずる云ふのでなく、電氣は何時でも放電しようとして居るのであります。その様に感謝性云ふものは、私は實に感謝したいけれどもお禮に行くのが面倒である云ふ譯のものでなく、こゝに感謝の放電、即ちお禮の對象云ふものを探して居る心的態度だ云ふ事を申しました。まあ、おかしな事を言ふ様であります、例へば偉い西行法師があつた通り色々な處にお出掛になつたのは何でせうか。あれは決して散歩して居るのではない。あの方は、胸に一杯感謝性があるから、その對象を到る處に探して歩いて居られる。さうして此處に行つてはこの山に感謝し、此處に行つては柳に感謝し、月に感謝し、曉に感謝し、鳥の

聲に感謝する。到る處に感謝する。立派な金堂のお社に感謝するだけで物足らなくて、山間の朽ちたる御堂に感謝するところ迄持つて行かうとする。對象が豪華版でなければただ感謝性が實は強く出るのであります。ですから西行さんの様になる。あの人はさうやつて非常に歩き廻つたのであります。

それ程、感謝性云ふものは對象を探して居る。幼児教育のところでは、私は對象をなまじあんまり早く片付けて與へない方がいゝかと思ひます。餘り對象を與へたまふと、對象に束縛されますから、成可く電池を放電する様に蓄めて置けばいゝ。さうして成年期になつてちやんこ何處かへ放電したがいゝと思ふのであります。細かいお話は別として、その何か探して居る、此所に問題が起るのであります。感謝性の方からは何かを探し度い。さうして人が、こんなに感謝の對象がある云ふ時に「彼處に行つてお禮參りをして來い」と言つて「さうですか」と言つて行くのですが、そこ迄は感謝性の自然の氣持として行くのですが、さてそこに行つて向ふを信するかさうかの話であります。これは別問題になります。何にでも感謝する云ふと、やたらに感謝する。「何でもいゝや、感謝は心であつて、感謝されるものは物で、物は感謝の心を託するものである」と云つた様な立場からは、下らぬ物だけども然し何しろこれに一寸感謝して置く、と云つた様な事になつて、向ふを本當に信する云ふ事とこれとは別個の問題であります。多くの人がそこで宗教的内部的苦しみをして居るのぢやありません。感謝したくてたまらないけれども、信する事が出来ない云ふのが宗教の苦しみであります。中には、頼みたくてたまらないが、何處へ頼んだらいゝか分らぬ、と醫者でも探して居る様な宗教を悩んで居る人がありますが、そんなのは、勝手に悩んで居る。さう云ふ人こそ、直ぐに、一寸誰か神様銀行頭取なん云ふのが出て來れば、インチキ宗教にかゝるのであります。さうでなくて感謝云ふ事は、一杯に出て來るが……さうしてそこに行つて感謝する氣持は一杯に出るが感謝があるのにこれを信するかさうか、これは別の心理であります。感謝云ふのは、心の働き

言ひますか……人格全體のポテンシャルティーの様なものです。だから心の働きぢやない。その人柄です。不平家ミ感謝心ミは、その人の人柄であります。心臓の恰好でも違つて居るのでせう。

所で、信ずるミ云ふ方はこれは別の問題であります。そこでその信ずるミ云ふ方の事に就て、矢張り小さい時から問題を考へて置かなければならぬのであります。

そこで、その問題に就て斯う云ふ事を考へます。信ずるミ云ふのは、キャラクター全體の問題でないので、大體に於て普通智的な判断を、基礎ミします判断をするミ云ふのはおかしな事です。「あんたはさう云ふ人か知らぬが兎に角信じさせてくれ」ミか何ミか言はれる。まあそれは御隨意ですけれども、さう云ふ事を基礎にしてお出でになるかミ、斯う問題になる。信ずるミ云ふ事は判断ですから、判断は、基礎があつて、論理的に信ずるよりしかありません。論理的に信じて行くのであります。こゝでは、その信ずるミ云ふ事の問題である、斯う考へ度いのであります。論理的に信じて行くのであります。基礎がなければ信じられないのであります。基礎なしに信ずるミ云ふのは妄信であります。妄信では信ぢやありません。基礎がちやんミあり、理窟がちやんミあり、信ぜざる可からざる結論が頭に立つてから信ぜられるかさうかミ云ふのは別問題であります。決して、斯うで斯うだから信ぜられるミ云ふ譯に行きませぬ。二二二二二寄せれば四であるミ云ふ事を余は信ずるミ言ふ人がありましたならば、非常に偉いものだと思ひます。それは私は、二二二二二寄せればそれが四であるミ云ふ事が、私ミ云ふものを離れて客觀的普遍的にさうであるミ云ふ事を知つて居るだけの事であつて、「二二二二二寄せれば四である。あゝ……」なんて、別にさうにもなりません。二二二二二寄せて五になつたミ言へば變てこになります。貰ふ方なら五にして貰つてもいゝが、貰ひ乍ら、勘定が變だミ云ふ事を言ふでせう。けれども二二二二二寄せて四になれば、疑ふ餘地はないのです。けれども信じて居るのぢやありません。これは、二二二二二寄せれば四

になる云ふ、天地不變の合理性だけの話であります。信は、その基礎からその手続きで來まして、信の剎那迄は合理性で運んで來ますけれども、空中樓閣ぢやないのであります。段々作つて行かなければ出來ませぬけれども、一番終ひにボカツ信になるかならぬか云ふのは別の問題であります。合理性に石だけ積めば、その上に城の魂が宿るかごうか云ふのは別問題であります。その信云ふもの、傾向を子供に養つて置く云ふ事は、非常に必要な事だと思ひます。信云ふ事を、合理性の教育だけに止めて置いては、甚だ足りないのであります。

さて、その信云ふのはそんなら何か云ふ、其所へ來る順序は合理的であります。皆様の中のお若い方がお智さんをお選びになる場合でも、色々お調べになるでせう。日本中の新聞社に相談してお調べになるでせう。調べて、この通りだ云ふ事で、終ひに信するかごうか別です。そこで一番終ひにボカツ決つて來る。合理性が信になつて來る。そこは何だらうか云ふ、ごうもこれは、何だと言へませぬ。——うまく言ひくるめて逃げて行く様で相濟みませぬ。——

田〇を寄せれば水になる。私は田〇云ふ實驗をよく知らないけれども、まあ斯う云ふ事らしい。田〇云ふ二つの原子がぶつかつた、その時まあ何所かでバツ……所謂剎那であります。あの人は實に……人と思つて居ても、剎那にバツミ來なければ、その人ミ意氣投合する事はありませぬ。この非合理性で信する事を、或心理學の本には易信性ミ書いてあります。これは、疑ひ易く、信じ易い。唯、信じ易い云ふのは人が好くなりますからあの字を避けて居るのであります。

信じ易いのでない、信じ難いのです。人間は、容易に信する事が出來ませぬ。合理的にさうであつたら云つて、信する譯に行きませぬ。だから易信性ぢやないけれども、その易信性ぢやないもの、或所でバツミ來る剎那がある。それが一體何であるか云ふ事は分りませぬ。分るかも知れませぬが、今私はよく言へない。言へないが、斯う云ふ事は言へるかと思ふ。

合理的にさうつみやつて來て、さうしてその結論が唯合理的に云ふ丈で終るか、所謂本當の信に云ふ事になるかきうか云ふ事は、多分その人の經驗に基くであらうと思ふのであります。その人が、さう云ふ信になる様な危険を始終持つて居れば、合理性が信になります。合理性の所で止つちまふ經驗で暮して居る人は、合理性で止つちまひます。こゝが問題だと思ふのであります。

そこで、さう云ふ經驗を持つて居る人は、さう云ふ風に、幼児で言ひますならば、育てられて來た人はさう云ふ事になり易いのであります。そこからはなり易いと言つてもいゝかも知れませぬ。信に云ふ事の基礎は、合理性であります。その終ひの、バツミ行くかきうかは別個のこゝまであつて、これはその人の體驗と言はうと思ふのであります。そこで、體驗であると思はますならば、斯う云ふ問題を——まあ時間をすつちつめまして結論に急ぎますが——考へようと思ふのであります。

感謝性を養ふのは、先生自身が持つて居る感謝性の影響であると思はしました。不平家は幼稚園に於て絶対に存在の意義がないのであります。先生自身の感謝性がそこに行くより仕方がない。そこだけの話であります。所がこの信に云ふ事になります時には、その先生がものを信するその體驗性を持つて居る人であるに云ふ事も大事です。これは、田舎なんかに行きますと、いゝ子供に會ふ事がある。さうして、さうしてこんな純真に、疑はずして信じて行く力があるかと思ふのであります。會つて見るに、親がみんなそんな人である。殊にお母さんがさう云ふ傾向の人である。餘りその傾向で合理性がなくても信する、そこは一寸又困りますけれど、そこ迄行く。そこで、さう云ふ意味で、その人が信に云ふ傾向を持つて居るに云ふ事が必要ですが、私は茲で、感謝性を一寸區別し度いのであります。

その區別は何か言ひますと、信に云ふ様な事のその本當の體驗は、自分が信ぜられるに云ふ事を必要とする様であり

ます。自分が信ぜられること云ふ事、感謝の生活が傳はつて來ますのは、自分が感謝されること云ふ事を必ずしもしない様です。これも、自分が感謝されたいです。先生自身が感謝性のある人ならば、幼児にも始終感謝するでせうからね。「私はイギリスで教養を受けたから、何事に就ても直ぐにサンキューこと云ふ言葉が出る」こと云ふ習慣でなくて、幼児が何かしてくれても、本當に、「有難う」こと云ふ氣持になるでせう。それは先生の方がその心になるから、自然幼児は感謝される位置に置かれる事になりますが、これ丈ぢや感謝性こと云ふものは養はれて來ないのであります。ここに依るに、餘り感謝されて得意になつて了ふ。「どうも今度の先生は感謝性が足りない」こと云ふ様な事にならぬことも限りませぬ。だから感謝性は、他に先生が感謝して居るのを子供が見て居ること云ふ、同じ方向への生活態度であるべきだと思ふのであります。信賴の方は、自分が信賴されること云ふ事が、自分がものを信賴して行く傾向になると思ふのであります。疑ひ深き人間は、一度も自分が信ぜられた事のない人であること斷定して居ること思ふ。自分が信ぜられた経験を持つて居る者は、人を信ずること思ひます。——宗教性の話をして居ましてそんな事を言ふのは罰が當りさうですが、神様が羨ましい。神様の様にあらゆるものから信ぜられたならば、私も逆にあらゆるものを信ずるであらうと思ふ。此方が信じられること云ふ経験が、信ずること云ふ事になつて來るのであります。

そこで、幼稚園に於きましても、先生が幼児を信ずる、信賴する——頼ること云ふ字は(字なんか説明しないでも宜しいが)癩のライぢやありませぬ。英語で言ひますに、レイヤグル、詰り、その人は確かな人だ、こと云ふ事でありませぬ。背任を背負つて一生やつて下さる人だ、誤魔化さないでやつてくれる、こと云ふ見透しをつけるのを、レイヤグルこと云ふのであります。——そこで幼児に向つて、あなたは斯うこと云ふ事をして下さい「こと云つた時に、二つの行き方があります。色々幼児にものをやらせまして、「あんたやつて御覽なさい。これも稽古である。本當は私がやつた方が確かだけれども、稽古だか

らやつて御覽。誤魔化さうと思つても駄目だぞ。色々な言葉が傳つて行く。子供は「成程これが教育云ふものか」と思ひます。けれども遺憾乍らその時に、信頼される、云ふ體驗は少しも得ませぬ。中には、何か仕事をさせて置いて、出来なかつたならば「さうだらうと思つた」と云ふ様に言ふ人があります。教育云ふものは、眞實の様な……少しインチキな所も入つて来ますが、私は、本當に幼児を信じ切る力がないからインチキになるので、本當に信じ切る人ならば、本當に眞實で行くと思ひます。例へば或事をさせた後で、子供はやり損ひます。出来ないのぢやないがやり損ふ。その時に「さうだらうと思つた」と説明をつけて了ふが、それ御覽なさいと云つた様な……何方が御覽だか分らない様な事を言ふが、出来なかつた事の方を、何か特別な理由で説明する。出来なかつた方の事を、特別の理由で「あんたが決して悪いんぢやない。私の見損ひだ」と言ふのはいけません。見損ひと云ふのは、蓋をあげた様な話です。さうぢやない。さうして出来なかつたらうと云ふか、色々出来なかつた事もある、色々な外的の事情で出来ない事もある、斯う云ふ風に説明して、自分自身云ふものゝ衷心的の信頼に就ては、子供がスポイルされない様にして行く。そんな扱も出来るかと思ふのであります。

斯う云ふ意味で、先生が本當に子供を信じ切る事の出来る傾向の多い人であつたら、非常に宜しいし、さうでなかつたら……と云ふより、もつと實際的に言へば、こんな氣持で居たつて、信じ切れない子供も遺憾乍ら多いのでありまして、そこでそれを信じ切る事は出来ないでせうが、教育に於ては、何か最少限度にでも信じない、この教育は出来ないのであります。幼児を最少限度に置く……これは幼児に限らない。大人同志も人を信ずるのは、最少限度に信ずるのが一番いゝのであります。人のところに借金をしに行く時は、向ふの貸してくれる最少限度で行けと云ふのが秘訣です。私なんか始終實行して居る。

「一萬圓貸してくれ」なんて法螺を吹いて行つたのでは貸してくれませぬ。けれども、「五錢貸してくれ」と言ふならば、

大抵成立する。だから、人を信ずるにしても、最少限度のところで信ずればよい。或人曰く「最少限度に信ずるのは、信七
ないに近い」。然し、最大限度に信ずる云ふことこそいゝ加減なものであります。最少限度に信ずる云ふ事は、詰り
信頼云ふか……信頼それ自體云ふものが如何なる意義を持つて居るものであるか云ふ事を示すのであります。感謝
の方ではつまらない木のかげらにも感謝出来る。金色の光まばゆきものには誰だつて感謝しますが、首のかけた地藏さん
にも感謝出来る時に、感謝性が強いものだ云つたと同じ様な行き方で、最少限度に信ずる所に信そのものゝ最大が出て
來ると思ふのであります。

斯う云ふ意味で私は、小さい子供を信ずる言つても大した事は出来ませぬが、信ずる云ふ事の理論は、合理性から
結論されて來るのであります。最少限度で信じたのではない、最大限度で信じたが、最少限度で信ずる、このもう
一つ次は、自分が信ぜられた云ふ経験が、理窟で言へない體驗になつて、他の人を信ずる傾向に養はれて行くのであり
ますが、信ずる云ふのは、理論の結論ぢやありませんから、こゝで、昨日の感謝性と同じ譯で、矢つ張りこゝから先は
ポテンシャルティーになりました、信じ度い云ふ氣持になるのであります。信じ得る云ふ所から、信じ度い云ふ所
に行くのであります。信じ度い云ふのを普通の宗教で言ひます様な工合に、信じて一つ厄介になり度い、そんな意味の
信じたいのぢやないのであります。だから、淋しいから信じ度いのぢやない。淋しいから……なんて云ふのは「此頃少し中風
だから太い杖を買つて來よう」と云ふの之餘り違はない。さうぢやないので、信じ度い云ふのは、何かを信ずる云ふ態
度でもものに向はなければ、此方が空漠を感じる。中には、ものを疑ふ。疑つてく、否定してく行く時に靈の力が出る
様なキャラクターの人もありますが、信じ度い氣持——そこに行く事は養へると思ふのであります。

斯う云ふ意味で、幼児の宗教性の問題が、感謝性から第二段のそこに行くのであります。最初に神秘性云ふものを附

加へて置きましたが、まあこれ迄で大體宜しいのであります。けれども、こゝを何故つけて置くかと言ひますと云ふは、斯う云ふ問題が出て来る。

さつき、信頼と云ふ事は、生活の上で、信じ度いと云ふ事がポテンシャルライズされてさうなつて来るのだ、斯う言ひましたが、然し吾々が強く主張し度い事は、その根本が合理性に基礎を置く云ふ事は初めに申した通りであります。信じ度い、だから合理性はさうでもない、云ふ事は許さないものであります。然しこゝにさうは言ひましたけれども、次の問題が起りますのは、その合理性と云ふ事に就て考へ度いのであります。

合理性と云ふ事はラショナルでありまして、それはさう云ふものでありませう。唯その合理性と云ふ客觀的に存在する合理的法則と云つた様なものを、その一杯の合理性で理解したり認識したり把握したりして行く事が此方に出来るか出来ないか、と云ふのは別問題であります。世の中には科學があると言ひますけれども、それだけ科學が私達に持たれて居るでありませう。殊に、科學的根據に於てと云ふけれど、それだけの科學的根據が私達にあるでせう。さうするに、こゝでは問題は幼児でありますから、合理性々々云つた所で、幼児の合理性なん云ふものは實に微けきものであります。實にまあ合理性のほんのはしくれの様なものであります。そこで、若しその微弱なる、貧弱なる合理性だけで結論を立てて行く云ふに止まるならば、これは到底満足は行きませぬ。私は斯う云ふ事を何時でも思ふのであります。

生意氣な人が世にある。宗教を批判して、「さうも科學的根據に於て立證せられぬから、我輩は信じない」と仰るから、非常に偉い事を言ふと思つた。その人の顔を見るに、「一體あんたは、科學をそれだけ知つて居るか」と言ひ度くなる。「一體あなたの頭が、それだけの科學性を持つて居るか」と訊き度くなるのであります。その人が言ふに、「甚だ分らないけれども科學者のところに行つて聞いて來た」幼児と云ふものは科學性と云ふものに基いて行く様に育てられなければなりません。

ぬけれども、現在はそれがないのであります。ないから、理論は合理性の上に基礎を置かなければならぬと言ひますけれども、合理性そのものを、人間が一杯に持つ譯はないのでありますから、自分の體驗を云ふ範圍内に於ては合理性だけに止まらないで、そこから先に何かあるかも知れないから、直ぐに合理性だけで否定して了はない丈の關心を持たなければならぬのであります。

これはまあ、皆さん一寸靜かに御解釋を願ふが、普通神秘性に進む云ふのは、中世紀あたりに出て來ましたのは、合理性を反對のものを言つたのであります。合理性以外のものがある、そこが神秘性の世界を言つたのであります。私はさう云ふ事に就ては知らない。私は合理性だけで一切が行くと思ふのであります。合理性以外の世界はないと思ふ。あの太陽さへもが合理的に動いて居るさうですから、そんな出鱈目はないと思ふのであります。神秘々々を言つて、合理性以外に神秘を立てれば、何が何だか分らなくなるのであります。だから合理性を一杯に持てるかさうか云ふ事は別問題であります。あります。けれども合理性は合理性であるけれども、私達が合理性を一杯に持てるかさうか云ふ事は別問題であります。

私達の科學性は、實に不完全で貧弱であります。そこでその合理性を云ふものが、私達に於て本當にそこから——私達には合理以外のものが澤山残つて居るのであります。世の中に、合理的以外のものがあるかさうか、それは知りませぬ。あるさきめて、一寸説明出來なくなるさ直ぐ合理性を言つて行くのは、實に縁日の人を集めて話して居る様なやり方であります。決してそんな事ぢやないが、私達には、私達の持つて居る合理性では行かない世界があるであらう云ふ事だけでは信ずる。さう思はなくちやならないのであります。

そこで幼児に、吾々よりもつこ科學性か合理性で行けない事が澤山あると思ふのであります。それを、合理的でないから云つてポン／＼捨てるのは亂暴であると思ふのであります。

そこで斯う云ふ結論になるのでありますが、神祕性云ふ事は、自分の持つて居る合理性の領に於て感ずる謙遜なる態度であります。自分が持つて居る合理性——世の中に非合理なものは御座いますまいけれども、私共に分らぬから云つて、直ぐそれが非合理だ云ふ断定する譯には参りませぬ、云ふ氣持であります。世の中に、合理云ふ大きな法則以外のものは許せませぬけれども、私共の持つて居る合理性に合はないから云つて、それが全く嘘である、間違つて居る云ふ事は出来兼ねます、云ふ態度であります。斯う云ふ氣持を子供に養ひ度いと思ふ。

有名なステイブンソンの詩にあります。子供が塀の此方から考へて、あの高い塀に登つた事はない、その向ふに何があるか知らない。大人ならば登つて見る事もある。彼方の世界を、子供は小さいから見る事が出来ない。子供の氣持が、ステイブンソンのこの詩によく出て居りますが、そんなものぢやないかと思ふのであります。證明が成立しないから嘘だと言ひ切り得る人は、自分が非常に偉い科學者であると思つて居る人で、證明出来ない事は嘘ですけれども、私は、證明出来ないから云つて直ぐ嘘は決らない、その氣持を、神祕性云ふ事で養つて行くのぢやないかと思ふのであります。世の中には、先生の様な偉い人にも分らぬものがある。「分らぬ人こそ尊まけれ」云ふ様な、そんな事を教へるのぢやありませぬけれども。行詰つた時に、自分の合理性でさうするか云ふ様な事よりは、もつこ先の事がある事を此方の謙遜なる態度で感ずる、斯う云ふ意味で、神祕性を解釋したのであります。必ずしもこれが宗教になりますものゝ限りませぬ。或は、宗教を分解したものゝも限りませぬ。けれども、斯う云ふものが幼児教育の中で養はれた時に、單なる、良善なる性情を涵養し、心身を健全に發達せしめる云ふ平板な解釋ではなく、偉大な宗教の文化に向つての立體性の教育が、こゝに出て来るのぢやないかと思ふのであります。

大變時間が長くなりますが、こゝで宗教云ふ問題を切り上げませう。

(次の藝術教育の項は、新年號から引きつゞき掲載いたします)